様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　元 年　 ６ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３９２５
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2018
課題番号：１６Ｋ０２４７０

研究課題名（和文）シェイクスピアの作品とその受容に関する根源的表象分析

研究課題名（英文）AN ANALYSIS OF SHAKESPEARE'S WORKS AND THEIR RECEPTION FROM THE STANDPOINT OF CULTURAL REPRESENTATIONS

研究代表者
高田　康成（TAKADA, YASUNARI）

名古屋外国語大学・現代国際学部・教授

研究者番号：１０１１６０５６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,900,000円

研究成果の概要（和文）：シェイクスピアの作品世界を支える根源的な原理を探るべく、タイポロジーと祝祭という二項対立を想定し、ジャンル別を基本として、いくつかの具体的作品を通して考察した。タイポロジーも祝祭も、あるいは隠然たるかたちで喜劇を支え、あるいは公然たるかたちで歴史劇を象る。両項とも対峙しながら、等しく世俗化による変容を経るが、ローマ史劇においては、殊にタイポロジーのオルターナティヴが前面に押し出され、ルネサンスと宗教改革という歴史的特殊状況の効果を浮き彫りにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義
我が国のシェイクスピア研究は、その解釈等の方法論において、西洋に流通しているものを踏襲する傾向があったし、また今なおその傾向が続いている。それ自体はある程度理解できるものだが、西洋的文化伝統は古代のギリシア・ローマとキリスト教の特異な融合から築かれたという認識を欠く場合、解釈と研究において根本的な曲解を避けることは難しい。本研究は、そのような状況に一石を投じる試みである。このことは、一般に行われる翻訳という営為についても、同様の警鐘を鳴らすものである。

研究成果の概要（英文）：Based on the assumption that there be axial principles on which turns the entire world of Shakespeare’s imagination, the present study proposes a radical binary opposition of ‘typology’ and ‘festivity’. An analysis of several significant works of different genres showed that the radical binary opposition is found either implicitly or explicitly as well as in its transformative styles. Both terms of the opposition underwent the process of secularization while their traits are brought to the fore against the backdrop of the specific genre of ‘Roman Plays.’

研究分野：シェイクスピア研究とその受容史

キーワード：シェイクスピア　タイポロジー　祝祭　世俗化　ルネサンス　宗教改革　歴史劇　ローマ劇

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９、ＣＫ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

「自然・本性」と「超越・実体」の両者が、ミクロ／マクロ・コスムの照応的調和を保って、大宇宙という統一された秩序をなすという世界像は、20 世紀中庸の英文学を代表した碩学 E.M.W. Tillyard の古典的研究『エリザベス朝の世界観』（1943 年）以来、シェイクスピアの作品解釈のいわば前提とされて久しかった。その後しかし、60 年代における実存主義的解釈あるいはその後の構造主義的分析の流行を受けて、ミクロ／マクロ・コスムの照応的調和の宇宙観は揺らいでゆき、80 年代の多元文化相対主義に立って「超越・実体」を脱構築する新歴史主義的潮流に至り（所謂カルチュラル・スタディーズ）、実質的に崩壊したと見ることができる。つまり、調和的大宇宙という前提の崩壊は、20 世紀後半のシェイクスピア解釈・批評の潮流においても見出しうる現象なのである。もちろんこれは、シェイクスピアの時代に起きた中世的調和的大宇宙の歴史的崩壊を主題とした一変奏にすぎない。

　こうした多元文化相対主義的な百家争鳴の思想潮流にあって、本研究が注目するのは、「自然・本性」一体説の再評価とともに、世俗化過程においてあぶり出された「超越・実体」的要素の再評価の動きである。前者は C.L.Barber に代表される文明批判的「祝祭」論であり、自然祭祀を素地とする人間・社会・自然を一体的に捉える見方であり、後者は W.Benjamin や C.Schmitt に代表される「影の超越・絶対性」を「ポスト宗教改革」という文化史的脈絡で問題にするバロック美学である。特殊日本的文脈からすると、前者は「道化」論などでつとに人口に膾炙したところがあるが、後者はユダヤ主義あるいはカトリシズムという西洋の基底に横たわる伝統ゆえ、馴染みが薄いと言わねばならない。

２．研究の目的

本研究は、「自然・本性」と「超越・実体」という西洋の文化文明の根幹に触れる根源的二項対立を分析のための作業的座標軸として立てながら、それぞれに纏わる表象とその機能を考察し、それを通じてシェイクピアの作品世界全体の根本構造をあぶり出そうとする試みである。ルネサンスと呼ばれるシェイクスピアの時代は、それ以前の――マクロ・コスム（「超越・実体」）とミクロ・コスム（人間的「自然・本性」）が照応的調和を保つ――中世的な基本的に静的世界像の秩序に、決定的な綻びが生じ始めた時期である。この種々の分野においても等しく確認されて久しい事実は、本研究が仮定する「根本的二項対立」を軸とした分析の有効性を保証するであろう。同時に、ルネサンスに始動しその延長線上に展開した「近代世界」でのシェイクスピアの受容あるいは受容史を考察するうえでも、われわれの「根源的二項対立」は然るべくその意義を発揮するものと期待される。本研究は、シェイクスピアの作品世界と受容史双方の根本的な骨格をあぶり出す試みに他ならない。

３．研究の方法

本研究は 3 年計画で進められた。各年とも、根源的二項対立双方の具体例がみられる具体的作品の分析を通じて考察を行った。作品の選定に際しては、テーマ的な同一性にたいしてジャンル的多様性を考慮した。第一年目は、いわゆる「タイポロジー」（聖書的予表論）と「祝祭」（豊饒祭祀的モーメント）の双方が通底して見える『間違いの喜劇』を中心にして扱い、その受容史を参照した。第二年目は、喜劇から英国史劇に転じて『ヘンリー四世』第一部および第二部を中心に分析を進め、「タイポロジー」と「祝祭」の更なる展開を探り、併せて受容史を参考とした。第三年目は、英国史劇から今度はローマ史劇に転じて『コリオレイナス』を中心に考察を進めることより、根源的二項対立のあぶり出しを明確にしようと試みた。

４．研究成果

《隠された根源的二項対立》――『間違いの喜劇』は、プラウトゥスの『メナエクミ』の翻

案にすぎない「茶番劇」である、という評言が国内外の研究者の間でいまだにあとを絶たない作品である。本研究では、双子の召使にたいするシェイクスピア独自の扱いに注目して、その表面的な相似とは対照的な人物的差異が示唆する「タイポロジー」的言説と世界像を分析した。その結果、『間違いの喜劇』の隠された中心主題が「時間」の問題であることを明かした。しかもその「時間」は、最後の審判を祖型とする「タイポロジー」的時間であり、そのさまざまな変奏が作品の最初から最後まで繰り広げられている。と同時に、その最後の審判を祖型とした「時間」は、作品の結末では異教の豊饒神が司る「祝祭」へと流れ込む格好となっており、我々の言う根源的二項対立は「喜劇」というジャンル的制約の下に強引に一つとされることになる。

国外の研究にあってもいまだに「茶番劇」であるとする批評がまかり通っている状況であれば、国内の状況は推して知るべし。「タイポロジー」的根本原理を無視するところはなはだしく、極端な場合には、近代後期の価値基準である「リアリズム」の物差しで見ようとする力技まであるが、文化の根本原理というもののしぶとさを知らない議論である。

《根源的二項対立の世俗化》――『ヘンリー四世』第一部・第二部では、根源的二項対立の各々が分離して「歴史」と「祝祭」となり、さらにそれぞれは世俗化していく。ヘンリー四世は先王のリチャード二世にたいする不義を贖おうとしてエルサレムへの巡礼を誓うという「タイポロジー」的なモチーフによって「第一部」は始まる。しかしこの望みは果たされず、最終的に「エルサレム」という名の王宮の間で死ぬという、ブラックユーモアに近いかたちで終わるわけだが、これは一種のアレゴリー批判という趣を呈する。アレゴリーは「タイポロジー」の世俗化にほかならず、すなわち我々の言う根源的二項対立の超越軸にたいする批判的な視座ということになる。更にこの批判的視座は、「英国史」（劇）という、そもそも根源的には「救済史」をモデルとする結構（ジャンル的視座）にたいする反省的モーメントとなるに違いない。（果せるかな、この歴史的世俗化のモーメントは『ヘンリー五世』にいたって更に先鋭化していった。すなわち国王＝救世主というアナロジーの明確な否定である。）

『ヘンリー四世』における「祝祭」の世俗化は、言うまでもなく、フォルスタッフに体現されて余りある。この特異な人物像が、元来は道徳劇の「悪徳」であり祝祭時の「仮の王」であったことは、文化人類学の驥尾に付すかたちでシェイクスピア研究者が明かしたところであった。フォルスタッフはしかし、あくまで歴史的な人物であることもまた同様に確かなことである。すなわち彼は「祝祭」の世俗化の究極の姿にほかならない。

『ヘンリー四世』を通じて、我々は「タイポロジー」と「祝祭」の透徹した世俗化を見るのである。

《根本的二項対立のオルターナティヴ》―- 一連の「英国史劇」と並行してシェイクスピアは等しく一連の「ローマ史劇」を創作した。両者の間にある明らかな差異は何かといえば、それは「タイポロジー」原理の有無ということに他ならない。古代ローマは異教世界であるから、当然と言えば当然だが、それを近代的「歴史主義」あるいは「歴史感覚」で済ませてはならない。シェイクスピアの生きた時代は、一般に言われるように、ヨーロッパで西漸するルネサンスの最期であり、同時に宗教改革の動乱に当たる。すなわち、「タイポロジー」的視座が否応にも①関心の中心となると同時に②その世俗化も進む、といった状況にあった。そのような思潮にあって、ことさら一連の「ローマ史劇」を構想した理由はなにか。その答えは、聖書的「タイポロジー」といった根強い伝統に対峙して、まったく別の形の時間と歴史からなる世界の可能性と限界を試すことであったと我々は結論する。その透徹した

根源性は、「ローマ史劇」の基盤として書かれたとしてよい長詩『ルクリースの凌辱』に見ることができる。ローマの共和制の始原を扱ったこの作品には、遠くトロイアの落城を描くタピストリーの叙述が挿入されている。「タイポロジー」の起源が聖書的「堕落」にあるとすれば、その異教的相関物は「トロイの落城」に他ならない。まさにルネサンスと宗教改革における根源的二項対立の然るべき変容であった。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 3 件）

① TAKADA, Yasunari, “I Privilegi Culturali di Cui Godono Gli Italiani, Forse Senza Rendernese Conto: Il Punto di Vista di Uno Straniero.” 『名古屋外国語大学論集』第 4 号 (2019 年)、83-97.

② 高田康成、「学園と公園、中野好夫の《シェイクスピアの面白さ》的心」, Artes MUNDI（名古屋外国語大学）、第４巻、2019 年, 124-137.

③ 高田康成、「《文化的指向性》論の基底と射程」、『インティマシーあるいはインテグリティ』[解説]法政大学出版局、2016 年, 277-286.

〔学会発表〕（計 4 件）

① TAKADA, Yasunari,“Karl Löwith’s Turn to Japan,” European Network of Japanese Philosophy,University of Hildesheim, （2018 年 9 月 7 日）.

② TAKADA, Yasunari,“A Comparative Genealogy of ‘Amicitia’,” International Society of Friends of Cicero, University of Torino, (2017 年 9 月 4 日).

③ 高田康成、「《シェイクスピアの面白さ》とは何か」、日本シェイクスピア協会主催・日本英文学会共催、明治大学 2017 年 4 月 23 日)。

④ TAKADA, Yasunari,“Some Thoughts on Cultural Disarmament,” European Network of Japanese Philosophy, Free University of Brussels, （2016 年 12 月 7 日）.

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。